



目次

アンドロイドの裏稼業	1
剥がし屋	9
襲撃	19
ヴィーナスの誕生	26

アンドロイドの裏稼業

西暦二千百七十二年、トウキョウシティ。

東京都庁を中心に乱立するビル群。そのビル群をぐるりと取り囲むように、直径二十キロメートルの壁が急ピッチで建設されている。十万年続きそして終りを告げる温暖な間氷期の次に来るであろう氷河期に向けた対策である。世界中の気象予測コンピューターは氷河期の到来を疑いのない事実として予測している。十万年単位で訪れるそれが十年後なのか千年後なのかはコンピューターにもわからない。だが、壁がなければその時をもって人類の歴史が閉じることだけは疑いようのない事実だ。

壁は上方へいくに従い丸みを帯びドームを形作る。トウキョウシティドームワンである。ビル群を囲うドームはトウキョウシティだけでワンからテンまで十個建設される。それぞれのドームは高速地下鉄道でつながれ、同様に建設される各主要都市へは大小様々なジェット機で移動することになるが、そもそもネットワーク経由でのアンドロイドへの意識転送が可能となった現代では物理的な移動にこだわる必要はない。

各ドーム内はビル群を空中回廊が結び、その回廊をトランスポートビークルが縦横無尽に走り回る。ドームは無数の照明で輝き情報という血液を吸い上げて脈動する巨大な一つの精密機械だ。煌めくその様は人類が作り上げた至高の芸術品と呼べる。

そんな芸術のような都市の一角、どちらかといえば下層に位置する場所に古びたビルがあり、その中ほどに小さな占い館があった。『アリスの占い館』という名の目立たぬ店で、赤い格子の扉を開くと、ほんの二畳ほどのスペースに木の机が一つと椅子が二つ置かれている。壁には無国籍かつどこかアジア風な柄の壁紙が貼られ、わずかに張り出した棚に価値があるのかないのか区別がつかないつややかな石や、古びた木彫りの人形などが雑多に置かれていた。床には陶器製の置物やツボが無造作に置かれ、店内はさながらアジアの混沌そのままのような有様であった。それらは決して計算された配置ではなく、ただ単に店の雰囲気エキゾチックに演出するためだけに置かれた物であるが、ここを訪れた客は不思議とその雰囲気に飲まれ、店の主にここを委ねようという気になった。

そんな中に一つだけ不釣り合いな物が壁に立てかけられていた。

一振りの剣で黒い鞘に銀色の梅の装飾が施されていた。ちりばめられた梅の花は粋なようでいて、実は見ようによってはその配置から死に神にも見えた。鞘から抜けばその身もまた黒く文様だけが白鋼色に磨かれている様は、見る者を威圧する力を感じさせる。何より異様なのはその側面、黒い鎬（しのぎ）に細かい文字が刻まれていること。間近で見ればそれが般若心経であることが読み取れる。それはかつて当代一と謳われた憑き

物落とし、津軽屋十四代目のジョーが所有していた斬霊剣であった。

ジョーはこの業物で数え切れぬ数の憑き物落としをこなしてきた。それは、まさしく霊を切るために生み出された怪刀といえる。それをアリスが訳あって受け継いだ。

そんないわく付きの剣が静かに、そして圧倒的な存在感を持ってそこに立てかけられていた。

入ってきた客はその斬霊剣を見て落ち着かない気持ちになる。

そこへアリスは声をかける。ぐらぐらと揺れる心に。

だが、アリスの姿を見た客はより不安になる。

アリスはやや小柄な女性型アンドロイドだ。栗色の髪は短めで耳が隠れる程度。占い師特有のエキゾチックな衣装やベールは身に着けず、黒いタイトなボディスーツを身に付けていた。胸のロゴを見ればそれが世界でも有数の軍事メーカー製だと分かる。その違和感が客を不安にさせた。そして右目を中心に顔の三分の一を覆う大きなあざを目にすればなおさらだった。

アリスの一番の特徴は左右瞳の色が違うオッドアイだ。右目は碧で左が銀である。通常の瞳は光学レンズと受光素子の組み合わせだが、アリスの右目には別の機能が組み合わされているため碧色をしている。その碧い瞳とあざがアリスをより神秘的に見せていた。

左右色の違う二つの瞳に見つめられた時、客は中心を失ってふらつく心の安定をアリスに求めようという気持ちになる。もはや黒のボディスーツ姿も神秘性のかけらもないショートカットも関係がなかった。

とはいえ、客はめったに訪れなかった。

だからアリスはいつでも目を伏せ、スリープ状態になると黙って客が来るのを待っていた。待つのは得意だ。それはアンドロイドにとって最も得意な作業のひとつだ。

その間、街の誰もがあらゆる判断を間違えない機械ロジックに委ねていた。多くの人がPC（パーソナルコンシェル）という名のバイオチップコンピューターと接続し、判断を仰ぎ、言葉を発し、キャラクターを完成させている。PCのおかげで人々は悩むことがない。

だが、ごく稀にPCにも判断がつかないような出来事に遭遇することがあった。

PCは多くのそれらしい答を示すことができるのだが、全てに答がある社会でそれらしいが誰も納得しない答を受け入れることは、世間に弱みを握られるのと同じだ。弱みは個人の価値を下げる。不完全な答を受け入れればキャラクターは崩壊する。そしてそのログは永遠に残る。

そんな時に、人はこっそりとこの場所を訪れる。

「いつから？」

「ひと月ほど前から」

「時々、あなたの亡くなったお父さんが枕元に立つようになったと」

アリスの前に座る男はうなだれている。精も根も尽きたといった具合で目は落ちくぼみ虚ろだ。

「ここ数日は毎日なんです。何を言うでなくじっと私を見つめている」

「せめて何か言ってくれれば、対処のしようもあるが、黙って見つめているだけではどう

していいかわからないと、そういうことです」

「なんとかしてくれ。PCに聞いてもそんなものは存在しないと言うばかりで埒が明かない」

アリスは目の前に置かれた直径十センチほどの水晶玉に両手をかざした。水晶玉は偽物だったし、そこから得られる情報は何もない。

ただ、こうすると大抵の客は勝手に納得した。この、目の前に座るアンドロイドには不思議な能力があり、水晶玉の神秘的なエネルギーが高次の存在とつながり宣託を得られるのだと。

高次の存在などアリスは見たこともないし存在するのかも知らない。これはただのパフォーマンスだ。

だが、高度に発達した人工知能ですら導き出せない答、人工知能連合会の間では人間に独特の妄想と定義付けされている、スピリチュアルな世界に対する回答をアリスはその右目で導き出すことができるし、多くの相談者はその回答に納得して帰っていく。

だからアリスはこの世界ではちょっと知られた存在になりつつあった。

アリスは男の頭の上あたりを碧い右目で見つめた。その右目はエネルギーの流れを見ることができた。原理はこうである。人は誰でも特有の生体エネルギーや意志による『場』を持っている。それら『場』が持つ影響力が重力加速度に非常に微妙な変化をもたらす。その変化を独特の四次元時空グラフ形状とすることで流れを見ることができた。グラフ形状は人それぞれで一つとして同じものはない。だが、ここに来るような悩みを持つ人のグラフ形状には似通った特徴が出る。

つまりそれは光学レンズでは見えない類のものを見ることができるということでもある。

「それではこれから霊視を開始します。目を瞑って心を静かに保ってください」

「静かに……」

「そう、静かに。何も考えず。静かに。そしてPCとの接続を切ってください」

男が息を飲んだ。

「接続を切るのか？ そんなことは」

できないと言おうとして言葉を飲み込んだ。

左右色の違う瞳が見つめる中、これから何が行われるのか男は十分に理解していた。男のPCではなく、目の前の、顔にあざを持つアンドロイドにしかできないこと。創造されたレイヤーの中には絶対に目にすることができないものを見る不思議の国のアンドロイド。

「切るのです」

男は逡巡しているのか、しばし左右を落ち着きなく見回すことを繰り返したが、やがて観念したのか男から表情が消えた。不安すら表現できない哀れなヒトという生物。

アリスのコアプロセッサがうなるように活動を開始する。

- ・・・制御ユニット右目に切り替え
- ・・・パワーユニット接続、リソース統合
- ・・・インスティンクトプロセッサ分離、サバイバルモード起動
- ・・・診断スタート

読み取りシーケンスが起動する。アリスの右目が男の頭上に焦点を合わせて微調整を始めた。全ての電力エネルギーを右目と重力加速度変化の計算に集中する。

アリスの視界は完全に重力センサーに切り替わっている。普段見る光学映像から、灰色の揺らめく世界へと変化している。今アリスが見ているのは重力が作り出す場を示す世界。微小な砂の集まりが揺らめくニュートンの海。だがそれはひとつひとつがその場の重力加速度測定点である。わずかな重力加速度の違いにより揺らめくように数値が変化する。時に数値は跳ね上がり、プロミネンスのごとく伸び上がり四散する。全てはこの世界のエネルギーの流れである。

男のいるあたりにわずかな揺らめきが見える。それは渦巻き、沈みそして流れていく。

アリスは全体的な流れを見る。その流れの先に男を苦しめている何かがある。意思を持つ何か。

流れは大きな渦に向かっている。光学レンズで見ればそちらには壁しか見えないが、場と捉えれば広大な海としてどこまでも見渡すことができた。流れの先には発電施設があり大きなエネルギー場を形作っている。発電施設は確かに莫大なエネルギーを扱う。だがそこに意思はない。予想通り流れは渦の手前で向きを変えた。そしてその先にある小さな淀みにつながった。

淀み。それは負の意識。悲しみ、恨み、嫉み。PCにつながることで人々が忘れたと思っている感情。決してなくならない想い。そこにはヒトが持つ深く暗い孔がある。

アリスはフォーカスを淀みに向けた。過去に扱った場と比較していく。

それは男性のパターンではない。

つまり父親ではない。

恐らく女性。

男と関係のある女性。孔から意思が立ち上ってくる。黒くて強い想い。

そう、これは恨み。男にないがしろにされ、そして死んでいった女性の恨み。

精神融合をしたのだろう。全てをさらけ出し、そしていいように破壊された心。絡み合った意識。引き出された恥辱。そして否定された人格。罵倒。男は精神融合した相手を徹底的に貶めることに喜びを見いだしていた。その結果相手は人格崩壊を起し自殺を図った。

医学の発達で人が死ににくい世界で自殺は異彩を放つ。女性の苦しみはそこに残穢として暗い場を形成した。

男はきっと次の獲物を探していたのだろう。そしてこの女性に見つかった。男の意識がネットワークを介して女性の場に流れ込んだ。意識は嗜好や思想によって同じようなパターンを持つ場に引き込まれやすい。それは男の歪んだ性格が、女性の持つ場と同じような場を無意識に探していたからである。ふたつの意識は再び融合した。

取り憑かれたのである。

アリスは男を見据えた。

「診断は終わりました」

男がゆっくりと目を開いた。徐々に表情が戻る。

「あなたの夢に出るのはお父さんではないはず。この女性ですね」

アリスは男の PC とつながり画像を共有した。今男はアリスが示した女性、ひと月ほど前に自殺した女性の画像を脳内で見ているはずだ。

男の顔が困惑から怒りへと変わっていく。

「おい、何を言ってる。俺が頼んだことを聞いていなかったのか？ この腐れアンドロイドめ。誰が女の話をしるなんて言った」

「あなたを苦しめているのはこの女性です。あなたは話をすり替えている。嘘をついてもすぐにわかります」

「ふざけるな」

男が大声をあげた。

「ぎゃあぎゃあくだらないことほざきやがって。これだから機械は嫌いなんだ。どいつもこいつも俺を馬鹿にしゃがって。俺を誰だと思っていやがるんだ。ええ？ 人間様だぞ。機械が生意気な口をきいていい相手じゃないんだ。貴様のようにくず鉄はこうしてやる」

男は懐から大きめのペンのようなものを取り出した。だがそれはペンではない。小型の指向性電磁波発生装置、つまり電子銃である。電磁波を浴びると大抵のコンピューターはチップが焼けて使い物にならなくなる。レーザー銃同様に規制対象品のひとつであるが小型のものは闇で手に入れることができた。男は電子銃をアリスに突きつけると悦に入ったような顔をした。

「どうだ。怖いか。五分後にはおまえはただのくず鉄になるんだ。人間様を馬鹿に……」

男が喋り終わる前にアリスは電子銃を二つに折っていた。同時に男の腕を取りひねりつつ手前に引き倒した。男が机に突っ伏したところで上から首を抑えた。

「痛い、痛い。離せこのやろう」

「本来なら代金は個人信用ポイント取引になるのですが、このようなケースではオートペイになります。加えて店内で暴行を働こうとしたため追加チャージをいただきます」

「ふざけんな。あ、イテテテ」

「一分間このままお待ちください」

「何言ってやがる。くそ離せ」

一分後にアリスは手を離した。男が腕を押さえながら起き上がり、アリスに文句を言おうと人差し指を突き出したところで、警官の大きな手がそれを掴んだ。

「はい、ご苦労さん。照合するよ。ええと、完了だ。おまえ、この間の自殺にも関係していたやつじゃないか。またかよ。暴行記録もちゃんと 3D 映像で残っている。よし、簡易裁判開始。文句はないな」

「おい、ちょっと待ってくれ。悪いのは俺じゃない。このくそアンドロイドだ」

「はいはい。ただでさえ精子バンクのウィルス騒ぎで忙しいのに、これ以上仕事を増やさないでくれ。アテナス、簡易裁判プロセスに証拠を送付した。裁判を頼む」

〈こちらアテナス。承知しました。〉

瞬時に関係者全員だけに聞こえるマインドコミュニケーションで結果が送られてきた。

〈簡易裁判結果をお伝えします。罪状、電子銃の不法所持およびその使用未遂。レベル

ファイブの低俗用語使用および脅迫。証拠の記録あり。以上をもって被告を有罪と認定します。罰金は百二十八円。オートペイから引き落としします。個人信用ポイントマイナス千二百。あと、この事件で個人株式が十五%下落しました。未遂でよかったですね。実際に発砲した場合は五十%以上の下落になり、レイアウトになるどころでした。それではしっかり更生なさってください

「だとさ」

男はひどく力を落とし店を出て行った。去り際に口汚く罵り、再び低俗用語使用でポイントを落とすことになった。

警官が店を出ようとしたところで、秘匿通信が入り、警官は本部としばらくマインドコミュニケーションをした。そして話が終わるとその通信をそのままアリスにつないだ。

「おまえさんにだ」

〈アリスだ。何の用だ?〉

〈やあ、アリス。芝警察署の張本だ。相変わらずの口調だな。それも元軍人のクセってやつか? まあいい。ケース X 発生だ。例によってゾンビが出た。データを送った。診断結果と一部 3D 記録も付いている。いつものように処理を頼む〉

アリスはデータを読み取る。国道一号線を VHS (Vehicle-for-Human-Split) が暴走している。VHS はアンドロイドの一種であるが、人間の意識転送専用ボディであり、意識転送されて初めてまともに動作する。単体で行動はできない筈なのに暴走するため、警官たちは暴走 VHS をゾンビと呼んでいた。このゾンビの体にはすでに複数の穴が空いていた。対 VHS 対策武装アンドロイドである AP (アーマードボリス) に撃たれた痕だろう。だが、途中から VHS の姿がかき消えてしまった。カメラが VHS の姿を記録できなくなったのだ。カメラだけでなく、GPS による位置情報も消えてしまう。3D 映像が一部しかないのはそのせいだ。

つまりケース X 発生というわけだ。

位置情報で追跡できなければ、アンドロイド警察は手も足も出ない。もちろん実体があるのだから、その場に警官がいれば見ることはできる。だが生身の人間では危険が伴う。昨今現場配備はほとんどが AP である。

そのケース X を扱うのがアリスの役割であった。いわゆるゾンビハンターであるが、状況はそれほど簡単ではない。ケース X の暴走アンドロイドは制御系が論理的に動作していない。通常のアンドロイド用の OS であればロジック的な判定が可能であるため、AP が無効化の手順に従って捕獲するが、その手順が全く通用しない。どちらかといえば人間的であるが、人間の行動論理にも当てはまらないのがケース X であった。

〈ゾンビの原因はつかんでいるのか?〉

張本に変わりアテナスが応える。

〈原因がわかれば苦労はしません。ただ、今回もアトロポスが絡んでいるということは分かっています。もし現場でアトロポスを見かけたら、無力化の協力をお願いします〉

〈俺は警官じゃない。そっちの仕事はそっちでやってくれ〉

話を聞いていた警官が口を挟んだ。

「つれないな。それに地が出ているぞ。ちったあ女らしくしたらどうだ」

「アンドロイドに性別はない。市民として協力はするがあんたらは客じゃない。へつらう意味もない」

「ちゃんと謝礼は払っているだろ」

「必要経費をもらうのは当然だ。おかげで店が空になる」

「それほど混んでいるように見えないぜ。ここで仕事ができるのは誰のおかげだと思っているんだ」

警官が侮蔑的な視線で周りを見渡す。

「急ぐんじゃないのか？」

警官は舌打ちすると、さっさと行け、とばかりにあごをしゃくった。

アリスは最後の目撃情報と診断結果から行動予測を行なった。今までのケースX行動パターンから、ゾンビは近くのビル下層部に潜んでいる可能性が高い。地図から三田エントランスタワーを選択し、斬霊剣を手にとるとそこまで緊急モードで走った。視界に走行イメージ線が現れるので、時速百キロ以上で走っても問題ない。実のところ、緊急モードをアテナスが支援しているからできることでもある。アテナスは行政アシストだけではなく、交通アシストも行っている。全ての機械製品はアテナスにつながっているからこそできることだ。

〈三田エントランスタワーに着いた。アテナス入館許可を頼む〉

〈許可します〉

いくつものセンサーがアリスを捕捉しているのがわかる。鬱陶しい。

エレベーターで一気に最下層の地下十二階まで下った。地下十二階は地下物流トンネルの配送階と汚水ポンプがある。アリスは通常の五十%レベルでリソースを右目に集中した。意識レベルを何%かビル制御コンピューターにリンクすれば、敵の居場所はすぐに割れるだろうが、逆もまたしかりである。極秘裏に動くのであれば接続は厳禁だ。さらに検索モードも敵が潜む状況で完全検索は危険だ。いつでも反撃できるようにしておく必要がある。

すぐにエネルギーの流れをキャッチした。思った通りゾンビは近くに潜んでいる。アリスは斬霊剣を握りしめると配送センターに向けて歩き始めた。

配送センターには多くの配送待ちの荷物が山積みされていた。その隙間をゾンビが残して行った黒いエネルギー痕に沿って進む。そもそも無人エリアで全てが自動配送のため明かりはないが、通路をナメクジが這ったようなエネルギー痕を残すのがケースXの特徴だ。彼らはいつも闇にのまれて悪意とねたみと悔やみといった負のエネルギーをまき散らしている。何がそうさせているのか分からない。ケースXに陥る直前、アトロポスと呼ばれる何者かによって、強い負の感情をわき起こさせられ、そしてVHSに意識転送していたホストの意識はどこかへ消えてしまう。ホストの肉体は意識を失い植物状態化する。そしてVHSはなぜか暴走を始めるのだ。

地下物流トンネルの手前にゾンビは立っていた。アリスが来ることを予測でもしていたかのように、アリスが近づいたのを検知して物陰から現れた。

このゾンビも首がない。いわゆるアトロポスの手口である。切り落とした首を持って帰って何をするのかは不明だ。VHSの頭部は、意識転送ポートはあるがコアはない。重要部品も希少金属もさほどない。首を飾る趣味でもあるのなら別であるが。

〈お前はホストを失っている。ただの抜け殻だ。おとなしく停止しろ。今すぐシャットダウンすれば面倒なことは何一つ起きない〉

マインドコミュニケーションでも訴えてみるがゾンビは動かない。シャットダウンする様子もない。

「耳がなければ聞こえないか。まあいい」

〈アテナス、強制停止を行う。許可を〉

〈強制停止許可します〉

アリスは斬霊剣を鞘から抜いた。その刃は先端から鏑まで般若心経が刻印されている。それはかつて当代随一と謳われていた憑き物落としかから譲り受けた剣である。その切れ味は折り紙付きだ。アリスは右目のリソース集中率を上げてエネルギーの流れを読み始めた。

ゾンビの下半身にエネルギーがたまっている。こちらに飛びつこうとしているのだろう。もっと気になるエネルギーだまりが胸にある。調査済みの型番から内部構造を探るが、そこにあるのはただの姿勢制御系ユニットだ。高エネルギーモジュールではない。この位置関係を人体に当てはめるとそこは心臓になる。

「いけすかない。おまえを動かしているのはホスト自身。けどもうホストの意識はここにはないはず」

ゾンビは二、三度、とんとんと跳ねるような仕草をすると、それを合図に飛びかかってきた。

アリスは身を低くしながら剣を下に構えて上方に切り上げた。金属を切り裂く耳障りな音がして、ゾンビの右腕が切り落とされた。ゾンビは一瞬バランスを崩すが、姿勢制御ユニットが瞬時に働き重心補正を行う。その流れで残った左腕をアリスに絡めようと振り上げた。

そのタイミングを逃さず上から剣を振り下ろす。

右腕に続いて左腕が宙を舞う。

頭部がついていたら、このゾンビはどんな表情をしたのだろうか。驚きの表情かもしれない。だとすれば、次はもっと驚くことだろう。

アリスは剣を水平に構えると、一気にゾンビの胸を貫いた。切断された電気系がショートして火花が散る。腹を蹴りつけて斬霊剣を抜く。倒れ込んだゾンビに馬乗りになると九字を切った。

「リンビョウトウシャカイチンレツザイゼン」

そして剣を逆手に持ち、一気に胸に突き刺した。

「破！」

バッテリーを貫くと、プラズマ電流が剣を伝ってあたりに放電し始めた。

アリスはその場から飛び退くと物陰に身を潜めた。青い閃光があたり一面を照らし出している。数秒もすると徐々に明るさを失い、あたりは元の暗さに戻った。

アリスはゾンビのそばにしゃがむと、切断面を観察した。切断面のすぐ内側に奇妙な装置があるのを見つけた。神経制御系のケーブルにそれは蛇のように巻きついていて、すでにプラズマで焼けていてプログラムを確認することはできないが、アリスはそれを取り外して慎重にポケットにしまった。

〈強制停止完了。経費はオートペイで頼む〉

〈強制停止を確認しました。いつも通りオートペイを行います。さすが元軍人。いつもながら見事な手際ですね。アリス〉

〈政府アシストコンピューターはいつからお世辞を言うようになった〉

〈物事を円滑に進めるのが私の仕事ですから〉

アリスは鼻を鳴らすと斬霊剣を鞘に納めて現場を後にした。アリスの背後では蜘蛛のような姿の清掃ロボットが残骸を片付け始めていた。

剥がし屋

キャメノスは建設中のドーム壁に座り、彼方にあるセカンドドームを眺めながら舌打ちした。

「チクショウめ。また失敗だ。この詐欺ボットは下手すぎる。やっぱ安物じゃだめか」

小遣い稼ぎにとネットに仕掛けていた詐欺ボットが、あえなく老人の PC に返り討ちにあって消滅したところだった。

急激な気候変動と異常な緑化から都市を守るため、五年ほど前からドーム建設が開始され、今ではトウキョウシティだけでも十カ所で完成が間近の状況だ。ドーム同士は地下トンネルでつながり行き来ができるようになっている。もっとも意識転送が主流の昨今、実際に人間が行き来する理由はあまりない。

せわしなく動き回る建設ロボットたちが時折やって来て、キャメノスを邪魔そうに眺め、迂回して去って行った。

「そう邪険にするなよ」

キャメノスは呟いて壁のへりからドームの中を覗き込んだ。地面までは二キロメートルあるが、ビル群を結ぶ回廊が枝のように広がり下まで見通すことはできない。

やはり逃げるならアウトか。

ドームの外側はかなり荒廃が進んでいる。行政と自治区は全てドーム内のセフティエリアに集中している。アウトと呼ばれるドームの外側では、どこからともなく現れたカーボイーターたちによって、多くの建物が破壊の憂き目に遭っている。

カーボイーターはその表皮を高硬度のカーボンで覆われた巨大なツル植物だ。アスファルトの下から這い出して来たかと思うと、信じられないスピードで成長して建物を覆い尽くしてしまう。カーボンの表皮が固すぎて切り倒すこともできず、遂には夜中に人間をつかまえて食らうとかいう噂まで出始めている。おかげで人々は地下までシールドされたドームに移り住み、アウトはすっかり荒廃が進んでしまった。

それでもアウトに暮らす人々はまだまだたくさんいるし、ハイレイヤーに所属出来ないデジタルカースト下層の人々はアウトで暮らす以外に選択の余地はない。格差は目に見える物理的な壁とデジタルカーストの論理的な壁という二重の形で完成されようとしていた。

そんなアウトの人々の鬱憤がキャメノスのような仕事を生みだした。

『剥がし屋』である。

ハイシチズンと言われる、高貴を気取る高慢なハイレイヤー族の仮面を引っぺがすのだ。仮面を剥がされたハイレイヤー族の末路は哀れなものだ。

風が冷たい。空気が冷えている。

「また雪かね」

冷えた手をこすり合わせるとキャメノスはもう一度退路を確認した。まずエアライダーで壁を滑り降り地上まで一気に加速する。次にカーボイーターの枝を使って減速し、そのまま路地に逃げ込む。後はリサに脱出ポイントまで引っ張って貰えばいい。

リサのやつちゃんとスタンバっているだろうか。

まあ、あいつなら抜かりはないだろう。キャメノスはミシュラン社製エアライダーを眺めながら思った。

エアライダーは空気圧を利用して移動する簡単なバイクのような乗り物だ。クロムに輝く流線型のその美しい形状がキャメノスは気に入っている。この世で一番美しい乗り物だと思う。それになにより、小回りが効き機敏性は抜群で、逃走に使うにはもってこいだ。キャメノスはエアライダーで降下する時の空気を切り裂くような爽快感がなにより好きだった。

もちろんそのあと成功を祝って女たちを侍らし大騒ぎするのも大好きだ。

〈キャメノス。またいやらしいことを考えているでしょう〉

〈いいじゃねえか。ストレスの多い仕事にはご褒美が必要なもんだよ〉

〈何人もの女性に意識を転送するのはご褒美というレベルではないように思えますがね。それよりそろそろ仕事しませんか？〉

〈へいへい。よしルイージ。ターゲットの動きはどうなっている〉

キャメノスのPCであるルイージがマインドコミュニケーションで応える。

〈ドームテン、サンシャインタワービルの三〇一三会議室に入ったようです。予定通り。右から二つ目の椅子に座りました。距離一億八百三十万三千二百四十五ミリメートル〉

〈予定通りか。なら、いっちょう笹モンの化けの皮を剥いでやろうぜ〉

キャメノスが情報を視界に映し出す。

笹本康平

年齢百二十一歳

政治家

日本国粋党事務長

科学アカデミー会員

教育連盟東京支部長

勲章受賞歴二回

生体再生手術歴八回

角田レイヤーハイシチズン

その他諸々

「へっ。肩書ばかりくっつけやがって。いけすかない野郎だ」

キャメノスはあえて言葉に出して言った。言葉は白い息となって流れていく。

〈ジャンプポイントは大丈夫なんだろうな。あいつと組むのは初めてなんだ〉

〈人間性に問題はありますし、誰も会ったことがないという話ですが、レイヤージャンプ

ポイント計算には定評があります)

「ふーん。定評ねえ。ちゃんと仕事してくれりゃオバケでも何でもいいんだけどな」

キャメノスは興味なさそうに眩き上空を仰ぎ見た。

光を失いつつあるコバルトブルーの空に巨大な球形の人工衛星が浮かんでいた。通商連合所有のジュノーである。光の加減で表面に王冠が見えるという噂だが、視界ズームを最大にしても判然としない。

「ツキをもたらしてくれよ、貞節の女神様。ルイージ。やるぞ」

ルイージはキャメノスの合図を受け、レイヤーの合わせこみタイミングを計算し始める。

〈計算終了まで六十秒。ポイント座標を合わせます〉

「何がハイシチズンだ。てめえだってひと皮剥けば、アンダーグラウンドレイヤーの俺たちと同じだろうが」

キャメノスはそう眩きながら脇に置いたロケットランチャーさながらの円筒形状の機械を肩に担いだ。中性子銃である。

〈リンク〉

中性子銃の脇からワイヤーが伸び、キャメノスのこめかみに先端が貼り付いた。同時に意識レベルの五％を機械に転送する。これで中性子銃はキャメノスの体と一体化する。

〈三十秒前。ターゲットのプロセッサタイプ適合。改造二回実施のため、回路が十五ピコメートル右に移動しています。補正開始〉

キャメノスは中性子銃の加速スイッチを押す。コンプレッサーのような音が否応無しに気持ちを盛り上げる。

〈十秒前。レイヤー周波数同期開始。ズーム開始〉

視界ズームを限界まで上げた。目の前に無機質なサンシャインタワービルが見える。

〈五、四、三、二、一、レイヤージャンプ〉

キャメノスの目の前にあった殺風景なビルが、まばゆく金色に輝く豪華なビルに変身した。キャメノスのいるアンダーグラウンドレイヤーでは決して見ることはできない、ハイシチズンだけが見えるきらびやかな世界である。だが、そんな見せかけの世界にキャメノスは興味ない。キャメノスの興味はPCというコンピューターが生成した、見栄えのいいキャラクター、つまり『仮面』を剥がしたときに見せる戸惑いの表情だ。人は誰しもPCが作り出したキャラクターを外部に見せている。そして相手もまたそれを当然と考え、キャラクターで相対する。仮想のキャラクター同士がコミュニケーションを取り合うのだ。その人物たちの本来の人格は己の殻の奥深くで小さくうずくまり、外部との接触を拒んでいる。外部からのストレスに耐えられないから。レイヤーが上がれば上がるほど、その殻は分厚くなり、キャラクターは強固になる。

だが、それもこれも、脳幹部に埋め込まれたバイオチップが作り出すもの。だからこのチップを中性子で撃ち抜いてしまえば、キャラクターが作り出せなくなり、本来の人格が表に引きずり出される。

本来の人格を引きずり出された人が、最初に見せる表情はかならず戸惑いだ。

一体何が起こったのか？

キャメノスはその戸惑いの表情を見るのが好きだった。ざまあみろと思う。どこまでも貧富の差は広がり、ついには世界をレイヤー分けして、見るもの聞くものまで差をつけるようになった。高額で人気のレイヤーでは、見るもの聞くものすべてが天国のように美しい。そして汚いものもなければ、嫌な人物もいない。汚い言葉すら存在しない。嫌なものや人物は物理的に存在しても見せないし、触れ合わないようになっている。すべてレイヤークリエイターがそう定義づけしているため、PCがレイヤーで制御されてしまうのだ。そこで不快な思いをすることはなく、全てが円滑の回るようにできている。あらゆる人間が誕生と同時に生体チップを埋め込まれ、ネットに接続するようになったことで実現した世界だ。

今最も人気があるのは角田レイヤーだ。世界中のセレブたちが参加している。世界を動かしているのは角田レイヤーの人々と言っていい。対するキャメノスが属しているのはアンダーグラウンドレイヤー、犯罪者のための裏レイヤーだ。あらゆる裏情報はこのレイヤーに集まる。レイヤーの裏口情報についても。

この計算した裏口をレイヤージャンプで一瞬だけ跳び越え、そこから生体チップを中性子銃で撃ち抜くのがキャメノスの仕事だ。

だから人はキャメノスを剥がし屋と呼ぶ。

自分が仮面をつけていないことに気がついた人は、恐怖の声を上げる。一度本来の人格を見られてしまうと、もう元には戻れない。その情報は一瞬にして全世界に広まってしまう。たとえレイヤーアウトし、他のレイヤーに移動してもみんなが知っている。仮面を剥がされた者はその事実には耐えられず姿を消すしかない。

キャメノスは三〇一三会議室の右から二番目に照準を合わせた。

肩に担いだ中性子銃のうなりが大きくなる。それに合わせて視界がぶれ始めた。中性子銃から漏れ出る電磁波で電子部品が影響を受けているのだ。だからここから先は勘でしかない。勘で中性子を電子回路に打ち込める人間は世界中探してもそういない。もちろん機械にできることではない。

「全てを失っちゃえ」

迷いなくトリガーを引き中性子を筐本に打ち込んだ。

筐本の身体がびくりと仰け反り、ついさっきまで自信があふれていた表情が、生まれて初めて都会に出てきた少年のような、怯えて全てを見失っている顔になった。

「グッバイ。筐モン」

すぐに視界から金色のビルは消え、いつもキャメノスが見ている装飾がない世界に逆戻りした。レイヤーアウトしてしまえば、向こうからこちらを探すことはできない。見たくないものは存在しない。

〈やったぜ。ルイージ。今夜も祝杯だ〉

〈喜ばしいことですが、すぐに逃げましょう。当局に検知されました〉

向こうのレイヤーで探せなくても、こちらのレイヤーを見張っている連中はいる。なにしろ犯罪者のレイヤーだ。中性子銃の発射なんて恒星間ロケットの発射と同じくらい目立つ。すぐに警察検知アラームが視界で点滅し始めた。

「ちょっとまで。やらないといけないことがある」

そう言うとキャメノスは横を向き視界をズームした。遠く離れた別のドームで禿頭に口ひげの大男が仁王立ちしていた。その手にはキャメノスと同じ中性子銃を握り怒りに震えていた。ラットという同業者だ。キャメノスはラットに向かって中指を立てながら、腰を振り軽快なダンスを始めた。

「へい、ラット。聞いてるか。イエ！ おまえは役立たずの老いぼれだ。へい！ 俺のケツでも舐めやがれ。へいへい」

〈ロックオン検知〉

「やべえ、逃げろ」

キャメノスがエアライダーに飛び乗ると同時に、近くで作業中のロボットが火花を上げて吹き飛んだ。ラットが撃って来たのだ。レイヤージャンプしての狙撃は失敗の確率が高い。だから依頼は大抵複数の剥がし屋に出され、成功した者に報酬が支払われる。キャメノスとラットはいつもターゲットを奪い合う間柄であるが、概ねキャメノスが報酬を得ている。だからラットにしてみれば、キャメノスは目の上のタンコブなのだ。

だが、キャメノスに言わせればラットは旧時代の人間だ。昔はラットも一流だった。剥がしでも逃しでも右に出る者がいなかった。キャメノスたちが現れるまでは。時代は変わった。老兵は去るのみ。

キャメノスを乗せたエアライダーは外壁の斜面を一気に駆け下った。上がり過ぎたスピードをエアブレーキで一気に減速する。逆Gがかかり内臓が口から出そうだ。それでもブレーキは緩めない。壁を這い上っているカーボイーターの枝に向きを整えて逆噴射をかける。地面にたどり着くと同時に進路を雑多なビル群に向け再び加速。胃がよじれる。

〈合流ポイントを指示してくれ〉

〈ルートインプット。十秒で合流です〉

カーボイーターにいいように破壊された街は、いたるところでアスファルトが割れ、這い出したカーボンの巨大なつるがビルに巻き付いていた。完全に瓦礫と化してしまったビルも少なくない。道路にはうず高く瓦礫や壊れた車が積み上げられ、廃墟のような街並みだが隙間という隙間に露店を張り出し人々が遅しく生活していた。そんな街の路地をキャメノスは疾走した。

すぐに視界に警官隊登場の警告が表示される。相手は三機のマカロンだ。

〈マカロンに追いつかれるなよ〉

警察の小型巡回ドローンは円盤型のためマカロンと呼ばれる。内部にAPが二体収容されていて実に厄介な相手だ。

〈合流まで三秒、二、一。合流しました〉

「遅いじゃない。昼寝でもしていたの？」

すぐ左手から激を飛ばして来たのは『逃がし屋』リサだ。リサはこの限界で一番の逃がし屋でエアライダーの運転にかけては右に出るものはいない。ポニーテールにゴーグル。いつも年季の入った赤いライダーズジャケットをはおり、ブラックにステルスコーティングされたロータス社製エアライダーに跨っている。エアライダーには今まで逃げ切った数、食べかけのマカロンが描かれていた。

「早くリンクして、キャメノス。置いていかれたいの」

そしてリサはキャメノスの妹で、兄を兄とっていなかった。

「分かってるって。ルイージ。リンクしろ」

〈リンク完了〉

「飛ばすわよ」

視界の警告が赤く変わる。マカロンが迫っている。

リサが前に出てキャメノスのエアライダーを引っ張る。途端にスピードが上がり、キャメノスは首を痛めそうになった。

「運転が荒えんだよ、おまえは」

キャメノスが愚痴を言う側から、リサはエアライダーを露天市場に突っ込ませた。後方にはもうサイレンを鳴らすマカロン三機が迫り来ている。

リサは屋台と人と販売ドローンの隙間を縫うようにして駆け抜ける。

すぐ後ろを同じスピードでマカロンが追いかけてくる。

露天の商品やドローンを跳ね飛ばし、追手の妨害を試みるが、マカロンはまったく動じない。

急激に路地を曲がり、キャメノスの胃がよじれた。だが吐いている余裕はない。いくらリンクしているとはいえ、壁にぶつからないよう、キャメノス自身も操作する必要があった。リサに任せっきりでは逃げ切れたとしてもボロ雑巾のようになってしまう。いくつかの屋台を弾き飛ばし罵声を浴びながら市場を抜けたが状況は変わらなかった。

「しつこいわね。覚悟して。スピードを上げるわよ」

リサの言葉にキャメノスの胃が縮む。これ以上のスピードはキャメノスの限界を超えている。あとは運任せと言うことだ。

「南無三」

リサは追跡電波妨害弾とカメラ対策の閃光弾をばらまいた。強烈な閃光がカメラを焼き、マカロンの視界を奪う。同時に追跡レーダーは妨害電波で拡散され、マカロンはなすすべもなくビルの壁に激突した。

「やった！」

「いや、まてリサ。まだ一機付いてくるぞ。やばい、ありゃあ新型だ」

「もう導入されていたんだ。なら方法は一つしかないね」

キャメノスの背筋を悪寒が這い上がった。

「おい、止める。壁抜けだけはやめてくれ。失敗したらぺちゃんこだ」

「だったら、下ろすから歩いて帰って。ルイージ計算して」

〈座標計算中。ポイント X 三八七七五・一五。七秒後にアッパーレイヤーにジャンプします。六、五、……〉

「待て。おい、頭がいかれちゃったのか？ 自殺行為だ」

「兄貴は黙っていて。行くわよ」

リサは指定のポイント目がけて一気に加速した。街の風景がすごい早さで後ろに流れて行く。負けまいとマカロンが追って来た。まるで離される気配がない。前方には巨大なビルが立ちはだかっている。正面には鉄格子で閉鎖された正面玄関。このスピードで突っ込めば確実にお陀仏だ。だが、リサはスピードを緩めない。

〈三、二、……〉

「止まれ、止まれ。止まれえー」

キャメノスたちのエアライダーは超特急のようなスピードでビルの正面玄関に突っ込んでいった。

同時に閃光が弾け、キャメノスたちの姿がかき消えた。レイヤージャンプしたのである。そこに玄関があるのか無いのか知っているのはレイヤークリエイターだけだ。実際にあるものをいかに自然に違った風景に移植するかがレイヤークリエイターの腕の見せ所である。キャメノスたちがいるアンダーグラウンドレイヤーではここは鉄格子で閉鎖された正面玄関だ。そしてジャンプ先のレイヤーでそこに何が配置されているかはレイヤークリエイターに依存するのだが、実際の物理レイヤーでは多くの場合そこに何かがあるから各レイヤーでビルやその他の何かが移植される。だから玄関と思っていた場所に物理レイヤーで何もない確率は低い。

そしてジャンプ先がどこか知らないマカロンはビルの正面玄関に激突しないように、急減速しながらろうじてビルを迂回するしかない。もはやマカロンはキャメノスを完全に見失い、所在なさげにビルの付近をうろうろするばかりだった。

ジャンプしたキャメノスたちは鉄格子に激突こそしなかったが、扉の壊れた廃墟ビルの廊下を疾走することになった。廊下は行き止まりになっており、奥の扉が目の前に迫っていた。

「止まれえー」

フルスロットルで逆噴射をかけたが上げすぎたスピードは殺しきれず、キャメノスたちは扉を突き破り、机や椅子をなぎ倒しながら奥の壁に激突してやっと停止した。壁は勢いで半分崩れ穴が空いていた。

「俺たち生きているのか？」

「当たり前でしょう」

「何が当たり前だ。レイヤージャンプは単なる賭けだ。あやうく死にかけた。一步間違えれば挽肉だぞ」

「私はそんなヘマしないわ」

「三年前を忘れたのか」

キャメノスが気色ばり怒鳴った。

リサは睨み返したが、何も言わずにぶいと前を向いてしまった。

〈謝った方がいいのでは？〉

ルイージがそっと囁いた。

キャメノスは唇を噛んだ。余計なことを言っちゃったようだ。

リサは三年前、レイヤージャンプに失敗して大きな事故を起こした。そしてそのことを未だに引きずっている。無謀な賭けに出るのも、必要以上に突っ張って見せるのも、全て三年前の事故が原因だということは、キャメノスにも十分分かっていて、恐らく勝算のない賭けには出ないだろうことも。

だが、三年前のことを思い出すと、キャメノス自身気持ちを抑え切れなくなる。怖いのだ。何もかもを失いそうで。

「その。悪かった。そうむくれるな」

「知らない」

「扉が壊れていて助かった。頑丈なやつだったらヤバかった。それにしてもここはどこだ」

〈廃墟のようですが〉

「そんなことは見りゃわかる」

〈いえ、そうではなく、壁の向こうに奇妙な物があります〉

顔を見合わせたキャメノスとリサが覗いてみると、エアライダーが壊した壁の奥で何かが光っていた。

薄暗い部屋の中には棚が設えられ、バケツくらいの大きさの透明な容器が整然と並べられていた。

そして驚いたことに、容器の中には人間の脳と思われるものが溶液に浸されて沈められていた。

それぞれの脳にはチューブと無数の電極がつながっている。その電極の接触部がチカチカと小さく青い光を瞬かせていた。

「何だこりゃ」

「気味が悪いわ」

〈噂で聞いたことがあります。臓器売買業者の裏ビジネスで、意識転送して不要になった肉体を切り刻んで売った残りをどこかに隠しあるって〉

「これがそうだって言うのか。趣味悪いぜ」

「脳あつての転送だからね。売るわけにはいかないもんね」

「里帰りしてみたら容器の中じゃあ驚きを通り越して、ショック死しちまう」

〈そのビジネスを陰で仕切っているのが〉

「噂の 28G だって言うんだろ。あるかどうかも分からない組織だが、28G に関しちゃう危ない噂ばかりだ。臓器売買にウィルス拡散。最近精子バンクにウィルスばらまいたのも 28G だって話じゃないか」

「どこまでホントだかわかんないけどね。お陰で優秀な遺伝子が随分だめになったっていうのは本当みたいだけど」

「俺たちみたいな下層の人間にやどうだっていい話さ。どっちかっていうと『首刈り』も絡んでるって話の方がやばい。あれはマジでやばい。何にしてもこんな物騒な場所にいつまでもいる理由はない。さっさと引き上げようぜ」

キャメノスたちはエアライダーを反転させると出口に向かった。レイヤーが違えばマカロンと会うこともない。あとはセンサー網をうまく避けて地下に潜るだけだ。

だが、廃墟を辞してすぐに事態は悪化した。

壁が崩れたビルの角を曲がる時に別の廃墟ビルの内側で赤い閃光がきらめくのを目にした。

「やばい攻撃だ。隠れろ」

光を見たビルから一人の男が姿を現した。

男は黒いロングコートを身につけ、血のように赤く光る電磁ソードを右手に持ち仁王立ちしていた。

「おい、マジかよ。何だありゃあ」

問題は男の持つ電磁ソードではない。左手に持っている物。男は完全に切り離された

首を、髪の毛を鷲掴みにしてぶら下げていた。切断面からショートした火花がちりちり散っていた。アンドロイドの首である。

「おい、あれ見ろ」

「まさか『首刈り』？」

「何て言ったっけ、噂のあいつ」

〈アトロポスでしょうか。アンドロイドの首を刈って回るといふ噂の〉

「ああ、それだ。マズイぜ、ルイージ。実にマズイ。さっきのアレといい俺たちや、見てはいけないものを見ちまったみたいだ」

昨今、巷では首なしアンドロイドの事件が多発している。意識転送されたアンドロイドの首を切り落とし持ち去る事件だ。切り落とされただけなら、意識は元の身体に戻るはずなのだが、なぜか意識は戻らずホストは植物状態化してしまう。

たまに戻ることもあるようだが、戻った時には性格ががらりとかわっており、何事にも無関心で無気力な状態になっている。それはネットワークという無限の広さを持ち、時間の概念もない世界をいつ終わるとも知れずに旅する間に、心が擦り切れてしまうからかもしれない。

だが大半の被害者の意識は戻らない。どこに消えてしまうのかわからないままだ。意識が戻った被害者が手がかりだけでも話してくれれば進展するのだが、何を聞いても反応がないため調査は全くと言っていい程進んでいなかった。

その犯人がアトロポスであり、なぜか警察の包囲網をいともたやすくかわして姿をくらましていた。そのあまりの神出鬼没ぶりに、28Gが絡んでいるに違いないと噂されていた。

アトロポスがなぜアンドロイドの頭部を持ち帰るのかわかっていない。

そして被害者がアンドロイドの場合は首なしアンドロイドとなるが、そこにたまたま人間が居合わせたような場合は、その人物は首なし死体となる。

なぜ人間まで首なしにされるのか。

さきほどの光景を目にしたキャメノスからすれば、答えは一つしか思いつかなかった。あれは人間の脳を使った闇データセンターなのではないか。低温睡眠でアンドロイドに意識転送しているはずの肉体が、多数失踪しているのは周知の事実だ。安い業者に保管依頼をするのは闇の臓器売買業者に自分の身体を明け渡すに等しいのかもしれない。

そしてそこに大きく関係しているのが28Gとアトロポスだろう。

「だとしたら、次容器に入るのは俺たちだ」

〈逃げたほうがいいのでは？〉

「賛成だ」

「しっかり掴まって！」

キャメノスが身構えると同時に、リサはスロットルを全開にした。だが、壁にぶつかった衝撃で、コンプレッサーの調子がおかしい。せき込むようにエアーが吹き出すだけで、一向に加速しない。そうしているあいだに、アトロポスがキャメノスに気づきこちらに向かって来た。

「やばい。おい、動け」

〈一度エアライダーの制御をリセットします〉

「急いで」

〈再起動まで三秒〉

「おい、そこまで来たぞ」

アトロポスのフードの下で赤い目が爛々と光っているのが見えた。アトロポスは目撃者を赤い目でとらえると電磁ソードを振り上げた。

〈起動完了〉

リサは再びスロットルを全開にした。同時にのけぞるような加速が来てエアライダーは瞬時に最高スピードまで加速した。アトロポスの電磁ソードが首筋をかすめた。

「ふう。間一髪だったぜ」

〈良かったですね〉

「一度刈られれば兄貴も失言を反省したんじゃないかしら」

「うるせえ」

二台のエアライダーはアトロポスの攻撃を逃れやがて見えなくなった。

アトロポスはしばらくの間二人が走り去った方向を見ていたが、さして気に止めるでもなく元来た方角に歩き始めた。

〈どうやらサーバールームを見られたようだがいいのか？〉

〈問題はありません。いずれ彼らとは相まみえる時がきます。それが少し早くなっただけです〉

〈ならない。それよりこいつを転送する。受け取れ〉

アトロポスは首を持ち上げると、小さな箱を取り出した。蓋を開けると中でとぐろを巻いていたヒルのような姿の装置が身をくねらせながら這い出てきて、首の切断面に取り付いた。機械のヒルはしばらく頭を振り何かを探していたが、やがて目的のモジュールを見つけたらしくピタリと張り付いた。

〈レベルセブンで転送〉

途端に切り落とされた首は白目を剥き苦悶の表情を作った。開いた口からは声にならない苦悶の呻きが漏れ出た。ビルの奥では首を刎ねられたボディが恐怖から逃げようともがいていた。

「さあ、仲間のところへ行きな。もっともそこが天国とは限らないがな」

転送が完了すると機械のヒルは炎をあげて一瞬で炭化してしまった。

アトロポスは不要になった首を瓦礫に向かって放り投げた。

〈あなたのおかげで人々は完全意識への関心を日に日に高めています。その日がやってくれば躊躇なく融合するでしょう。それまで頼みましたよ。これこそが全てを突き動かすのです〉

「巷は恐怖に溢れているからな」

アトロポスは薄ら笑みを浮かべ静かに物陰へと消えた。

襲撃

三田エントランスタワーの最下層。エレベーターホールで上りエレベーターを待っていると、背後に何かの気配を感じた。とっさにアリスは横に飛び退いた。

背後から放たれたレーザーが壁をえぐり大きな穴を開けた。

「おっと、残念」

物陰から戦闘服姿でレーザー銃を構えた二人の男が現れた。

「賞金稼ぎか」

「おまえのことを知っているぞ。たしかアイアンザクスの名前でバトルロイヤルに出ている」

「ああ、俺も見たことがあるぞ。めっぼう強くて相手のアンドロイドをどいつもこいつもバラバラにしちまったよな。でも百勝した途端に姿を消した」

「それが今じゃあ『占い師』だっていうじゃないか。恐れ入ったよ。なんでも人間の気持ちを理解できる唯一のアンドロイドってふれこみだそうだ」

「けどな、そんな占い師に闇市場でえらい高値が付いている。知っているか？ 欲しがっている連中は警官だって話だぜ」

アリスは二人に冷ややかな視線を向けた。

「客ではなさそうだな。何の用だ？ 俺のことを調べたのなら、そんな物は通用しないのは知っているだろう」

ベルが鳴りエレベーターの扉が開いた。エレベーターにはボックスいっぱい大きさの、明らかに戦闘用に改造されたアンドロイドが乗っていた。

「相手は俺たちじゃねえ。そいつだ。やっちまえヒッグス」

「俺はおまえに試合を申し込んでいた。だがおまえは逃げた。だから今日ここで試合をさせてもらうぜ。レートは百二十対八十で俺が優勢だ」

言葉が終わらないうちにヒッグスと呼ばれたアンドロイドが右腕を伸ばして攻撃してきた。ヒッグスの左右の腕はどちらも肘から先がチェーンソーになっていた。それには小さな電磁カッターの歯がずらりと並んでいる。

アリスは腕の軌道を見極めて素早く避けた。アリスの背後の壁が火花をあげて切り裂かれた。どうやら並大抵のチェーンソーではなさそうだ。

〈こいつで切れない物はない。どんな合金でも真ふたつだ〉

ヒッグスがマインドコミュニケーションしてきた。

〈随分と不便な体をしているみたいだな。切れ味は良さそうだけど、仕事はコックか何か？ 野菜は逃げない。切れ味が良くても当たらなければ切れない〉

〈俺はネズミ専門のコックでな。すぐに思い知るさ〉

ヒッグスが左右の腕を同時に伸ばして来た。回転する刃が空気を切り裂く音をたてる。

アリスが右に避けようとした時、右手からエネルギー反応。そしてレーザーが行く手を阻んだ。とっさに体を捻ってレーザーを避けつつ、チェーンソーをかわす。

そこへ再び容赦なしのレーザー攻撃。さらにチェーンソーが次の攻撃。だがそれは距離が届かないだろうと高をくくっていると、驚いたことに腕が伸びた。

「くっ！」

ヒッグスの左腕がアリスの右肩を一瞬かすめて火花を散らした。

〈どうした。そいつが精一杯の早さか。引退の理由を知っているぞ。おまえは死を恐れている。死ぬのが怖いだろう。さあ、どうだ。徐々に死が迫ってくるのはどんな気持ちだ？〉

〈黙れ。俺は死など恐れていない〉

〈じゃあ、タスクがないのはどうだ。おまえは一体何のために存在している。占いか？ そんなのただの時間つぶしに過ぎない。おまえはこなすべきタスクがない空きマシンだ。マシンは都市の部品だ。仕事がないマシンは死んでいるのと同じじゃないか？〉

〈死とは非存在のこと。それに俺の占いは人々の役に立っている。おまえの腕の方がよっぽど無価値だ〉

〈ふん。俺はコックだからな。では人を殺すのはどうだ？ それは人の役に立つことなのか？ おまえはただの殺人アンドロイドだ。それとも頼まれたからとでも言い訳するのか〉

〈あれは〉

あれは、クエーカー博士の命令だった。プログラムされて拒否できない命令。それにクエーカー博士は今でも私の中にいる。

あの時の光景が脳裏に浮かぶ。

熟れたトマトにナイフを突き刺すように簡単だった。

クエーカー博士の胸を貫いたアリスの腕からは真っ赤な血が滴る。

我が子を見るような目で頷く博士。

そしてアリスに流れ込んできた博士の思い。

言葉、感情、意識、そしてそれらを構成する場。

右目が熱くなる。

崩れ落ちる博士。

クエーカー博士は今でもアリスの中に、本当にいるのだろうか？

〈あれは〉

ヒッグスの右腕が伸びて来てアリスをかすめた。

攻撃が来ない方向へアリスは飛んだ。着地した目の前に賞金稼ぎがいた。銃を構え、そして怯えた目をした二人のヒト。ヒッグスに謀られた。

アリスは相手が引き金を引くより早く、二人の首に手刀を叩き込んだ。もちろん人間相手に手加減している。だが、手に伝わってくる柔らかく心もとない感覚。あの日の記憶が再生される。ほんのわずかに力を加えただけで死んでしまうヒトという哀れな存在。存在していても、二度と存在できない。それがヒトにとっての死。アンドロイドの死と

は異なる死。

<どうした人殺し。そんなやわな攻撃じゃ殺人アンドロイドの名が泣くぞ>

アリスの背中をチェーンソーが捉えた。

瞬時に攻撃を予想して動いていたおかげで傷は浅い。だが、アリスはコーナーに追い詰められていた。

<さあ、逃げ場はもうないぞ。恐れていた死がやってくる。泣くのか？ 叫ぶのか？

さあどうする？>

アリスは瞬時に決断した。これしか手はない。

ヒッグスの回転する両手が伸びて来た。

アリスは右手を前に伸ばした。伸ばした右腕にヒッグスの左チェーンソーがぶつかり火花が飛んだ。肘から先はバッサリ切り落とされたが、そのわずかな抵抗でヒッグスの左腕軌道がずれた。新しい軌道の先にはヒッグスの右腕で回転する電磁カッターのチェーンソーがあった。勢いよく回転するチェーンソー同士がぶつかりあい、耳障りな音を立てて弾けた。そして弾かれたチェーンソーのひとつがヒッグス自身の左足を膝から切断した。

「くそつたれ。何しやがる」

バランスを崩したヒッグスの左腕を蹴り上げる。

蹴られた左腕はそのまま右腕にぶつかり、チェーンソーが右腕を切り落とした。

アリスは素早く切断され落ちた右腕を拾い上げ、ヒッグスの首を切り落とした。

ヒッグスはその場に崩れ落ち、切り離された首は壁まで転がって止まった。

<百一勝か。だが、俺はまた別の体に転送されておまえの前に現れるぞ。おまえと違っておれたちは死なない。バックアップがあるからな>

アリスはヒッグスの首を冷たい目で見下ろした。

<どうした。早くとどめを刺せよ。死を恐れるアンドロイドさんよ。それとも死んでいるアンドロイドか？>

俺は無価値な機械じゃない。やらねばならないタスクがある。

アリスはヒッグスの頭部を踏み砕いた。

右肘を隠すようにして三田エントランスタワーから出たアリスは店とは別の場所を目指した。かれこれ三年は行っていない。当時は必要があって毎日のように通っていた。引退してからすっかり足が遠のいた。だが当時からの契約で、まだアリスの部屋は保存されたままのはずである。店主がちゃんと覚えていてくれれば、の話であるが。

オート三輪で五分ほど移動しエレベーターで百二十階まで登ると目的の場所にたどり着いた。たいして装飾のない扉には小さく電子プリントで『シヴァルの工房』とだけ記されていた。中に入ると正面に受付があり、やや古めかしいホログラム受付嬢が笑顔で応対してくれた。

「何も変わらない、とでも思っているの」

唐突に脇から声をかけられた。声の方向を見ると鍛え抜かれた肉体を持つ、男とも女とも取れる人物が立っていた。店主のシヴァルである。

シヴァルは、生まれは女性であるが、究極の肉体美を追求した結果どちらの染色体をも持つに至り、性別を捨ててしまった。アリスの久々の来店に気づいて出てきたのであろう。

「ああ、そう思っていた」

「引退以来ね。随分ご無沙汰じゃない」

シヴァルの顔はやや曇り気味であるが、喜んでいるのは明らかだった。

「静かに暮らしていたからな」

この店はアリスが地下バトルロイヤルで戦っていた時に、修理の専属エンジニアとして契約して利用していた。高性能アンドロイド同士がバトルをすれば少なからずどこかが壊れるため、店には毎日のように通っていた。それも引退と同時に終わりになったのだが、アリスの一ファンであったシヴァルが何かあったら店で修理することを条件に、パトロンとしての永久契約を申し出てくれたのであった。

普通の生活でアンドロイドが壊れることはほぼない。メンテナンスなしで百年だって動く。

だがシヴァルの目は節穴ではなかった。黙って隠していたアリスの右手を取った。

「静かな暮らしね。落とし物を持っていればくっつけることはできるかもしれない」

アリスは黙って首を横に振った。ヒッグスを倒した後に探したが腕はなくなっていた。なくなる理由はネズミが啜えていったくらいしか考えつかない。センサーに検知されないネズミがいればの話だ。

「ナノマシンで再生できないかな」

シヴァルが肩をすくめた。アリスの設計図は現在も行方不明のままだし、仮に所在が分かったところで一般人が目には見えない。となれば手段は一つしかない。「賞金はまだたくさん残っているし、最新式をつけてあげる。あんたのスピードにどれだけ耐えられるか分からないけど、ないよりいいでしょ。オプティマイズはアーミーでいいわよね」

シヴァルがおもちゃを前にした子供のような目をしているので釘を刺すのは忘れなかった。

「ウェポンは止めてくれ。重たくなるから。それに電車に乗れなくなる」

新しい腕の装着はものの十五分で終わった。たいていのパーツはナノマシンによる自己融合機能が付いているので、分子レベルで結合しほとんど見分けがつかない程きれいに仕上がる。だが今回シヴァルが持ってきた腕は明らかに違和感があった。スキンがなく機械が丸出しになっていた。もちろんスキンでカバーされたパーツもあるのだが、今手元にあるパーツで一番性能の良いものを選んだ結果、プロトタイプでメーカーが持ってきた物になった。外見は気にしない。アリスは即決した。

新しい腕を馴染ませるために専用トレーニングルームに向かった。プログラムとハードのインターフェース結合は重要なプロセスだ。手を抜くと思った通りに動作しない。

トレーニングルームは擬似的に実践トレーニングができる部屋であるが、実のところシヴァルに頼んで軍にいた時に使っていた武器を置かせてもらっていた。武器はそれぞれプログラム融合してしまっているので、アリス以外の者が使うことはできないし、ア

リスには今回のような仕事が発注されることがあるため武器格納庫が必要となる。対人電気ショック銃、対アンドロイドパルス銃、対戦車用高温プラズマ銃などもはや使うことはないだろうという強力なものもあった。基本的にアンドロイドは家を持たないためにこのような置き場が必要になるのだ。

トレーニングルームの扉が開くと中に人がいた。アリスしか開けられない扉の内側に、中央の整備台に寄り掛かるようにして、一人のひどく小柄な男が立っていた。

アリスは身を低くすると一気に駆け寄り男の首を抑えるように押し上げ、空いた手で手近な銃を取って腹に押し付けた。

「ここで何をしている」

「いててて。わいや。その手を離してくれ」

もちろんアリスが知っている男だ。地下バトルロイヤル時代のアリスのプロモーターである。

井之方は身の丈が大人の半分ほどしかなく、冴えない風采をしている。小太り禿頭で丸眼鏡をかけていた。今の時代、どんな遺伝子操作だって可能だし、美しい姿のアンドロイドに意識転送することだってできる。なのに、この男はどうしてこのような当たり前の欲求の逆をいく姿を通してなのか。井之方にその理由を聞いた者は何人もいるが、いつも彼は適当なことを言って答えをはぐらかした。そして最後は「面白いんやからええやろ」と言って話を切り上げた。ふざけた男なのである。

だからといって、個人スペースに押し入っていい理由はない。この男はいつもそうだ。どういうトリックを使うのか普段人が出入りできない場所にいることがある。鍵開けが得意だとうそぶくが、トレーニングルームには鍵穴など存在しないし、停電になったところでロックが解除するものでもない。プログラム融合したアリスだけがロックを解除できる。

アリスはしばらく井之方の目の動きを読んだ。人間は嘘が目に出る。

「わいらはチームやろ」

「昔のね」

そこに動揺はみられないし、拷問してまで侵入方法を聞くんもなかった。井之方を離して銃を置いた。

「カッコええな、その腕。それと、忘れ物やで」

井之方が何かを放ってよこした。それは先ほど切り落とされたアリスの右腕だった。

「どうしておまえがこれを持っている？」

ヒッグスと戦ったのはほんの二十分前で、その時井之方の姿は微塵も見なかった。あの場にもう一人人間がいれば右目が感知していた筈だ。敵かもしれない相手を見逃すことは絶対はない。それに賞金稼ぎが拾ったとしても意識が戻ったのはアリスが去った後のはずだ。アリスより先にここに持ち込むことは不可能だ。

「道で拾うたんや。そんなことより、またわいと組んで儲けようや。あんさんがおらんようになってから、バトルロイヤルはどうにも面白みに欠ける」

ふざけたことを言うやつだ。

「もう、十分稼いだだろう」

「相手はヒッグスやろ。あいつは地下でも強かった。そのヒッグスに勝ったんや。まだまだいけるで。どや？」

「もうやる気はない。俺は引退したんだ」

「何からや」

アリスは思わず井之方を見据えた。

軍用の戦闘アンドロイドが一体何から引退したのか。もちろんバトルロイヤルという狂気の世界から。

井之方の目がそんなたわごととは聞きたくないと言っていた。

それが何の答えにもなっていないことは重々承知していた。アンドロイドは戦わない日々で腕が鈍ることはない。今日の戦いでまだ十分通用することも分かっていた。その目は占いやゾンビハンターが本来の仕事ではないことも、アリスが目的を見失っていることも分かっている目だった。

「唯我独尊やな」

それはアリスがアイアンザクスのリングネームで登場する時、真っ黒なマントの背中に大きく描かれた刺繍文字だ。特別な存在だからと井之方が作ってくれたものである。

アリスは自分が特別な存在であることを知っていた。

アリスとクエーカー博士は場という次元で融合していた。

それがクエーカー博士の遺言。逆らえないプログラム。

だが知っているからといって理解できているわけではない。

本当にクエーカー博士はあたしの中にいるのだろうか？

何度も自問を繰り返した。来る日も来る日も対戦相手の破壊を繰り返し、そしてその中に答を探した。見つかるはずもなかった。答を知るのはアリスただ一人。

だが、自分の中の答にはどうしても手が届かなかった。

知っているのに知らない。

そんなことを論理回路が受け入れられるはずもない。理解できないことをどうやって受け入れるのか。

受け入れられない事実から導き出される答えは一つしかない。

恐怖である。

「なあ、またやろうや。あの素晴らしい日々をもう一度や」

「俺には地獄の日々だった」

全 CPU パワーとリソースを使って相手を破壊する。それ以外の一切を考えられない日々。

「あんさんより強いやつなんぞおらんがな。誰もあんさんの腕も、心もへし折れなかった。せやろ。それはあんさんも分かっとる筈や」

「そういう問題ではない」

アリスは出口を指し示した。

井之方は肩をすくめると隠し部屋を出た。

「今日のところは退散するわ。でもまた来るで。わいはオモロイことが好きなんや」

井之方は店の扉を開いていったん店を出たが、ひょっこりと顔だけ覗かして言った。

「あと、猿には気をつけえや。あれは」

言葉を切ってニヤリと笑う。

「オモロイ」

そしてヒヒヒと気味悪く笑った。

ヴィーナスの誕生

地上から遥か上空を比較的小型の宇宙ステーションが静かに飛んでいた。いくつかの円筒形モジュールをつなぎ合わせてあるが、全体が黒いステルス塗料で覆われ、どこにも認識コードが描かれていない。もちろん認識コード確認信号を送っても何の応答もしない。なぜならそこには何も無いことになっているからである。

このステルス宇宙ステーションはとある組織の実験ステーションであり、内部ではヴィーナスと呼ばれる極秘の実験が進められていた。

「シスターワン。テストプログラムは最終フェーズに入って随分経つが、どうなっている」

実験棟では一人の男が脳に直接送り込まれた試験結果の画像を、視界いっぱいに広げて眺めていた。

〈はい。テストプログラムは最終フェーズの二万三千七百七十五シーケンスを終了し、結果ログも確認済みです。問題はどこにもありません〉

「ならどうしてあいつは起きようとしらないんだ。なんとかしろ。まったく。おまえら三体のアンドロイドを見つけるのにどれだけの手間暇をかけたと思っているんだ。しっかり働け」

男の名はスミス。この実験棟の責任者で唯一の人間だ。

ここの実験は全てコンピューター管理され、人間が自ら行わなければならない手順は何一つない。不測の事態が起きたところで、この実験棟にはスリーシスターズと呼ばれる三体のアンドロイドが配置されていて、彼らに指令を送ることでおおよそ事足りる。

そしてこの三体のアンドロイドこそが、実はアリスの設計者であるクエーカー博士と共に設計に携わったアンドロイドで、クエーカーの亡き後設計図をそれぞれが記憶してから行方をくらましていた。スリーシスターズはクエーカー博士がアリスに殺された後、クエーカー博士のプログラムに従い、世界を無秩序に逃げ回っていた。それを高度予測式追跡装置で見つけ出したのがスミスだった。

スミスがここにいる理由は、彼がこの実験の責任者であり結果を誰よりも早く見たかったからだが、同時に色々と面倒な事態になって地上にいたくないという事実もあった。

この実験は優先プロジェクトではなかった。だがスミスにはヴィーナスがこれからの時代に絶対に必要だと確信していた。だから、勝手に科学アカデミー長官の承認プログラムを書き換えて、自分のプロジェクトを最優先に設定し、発覚する前に実験を開始してしまったのだ。

もちろん、承認プログラムを書き換えたことはすぐに発覚した。だが、その頃スミス

はずで実験棟に入っていた。そしてこの実験棟はステルスである。絶対に見つからない。あとは結果を持ち帰れば、あの頑固な長官も許してくれるに違いない。

「おい、どうなっているんだ。シスターツ」

〈わかりません。データ整理に時間がかかっているのかもしれませんが。何せアウロラは一千万人の人々を千年間時間短縮でシミュレーションしたのですから、データも莫大なはずです〉

「そんなことは分かっている。初めからどれくらいのデータ量になるかは計算してあったし、事実その通りになっているじゃないか。なのに、予定時刻を一時間近く過ぎている。遅すぎる」

スミスはアウロラが格納されているカプセルの状態をもう一度確認した。全てのプログラムは完了しているし、ロックも外れている。本当にあとはアウロラが目を目を醒すだけなのである。それなのに、未だにアウロラの計算プロセスは何かを計算し続けている。テスト終了のメッセージが伝えられてからかれこれ一時間。いよいよアウロラの本能プログラムが暴走し実験が失敗したのではないかと思い始めた頃、唐突にアウロラは目を開いた。

シミュレーションカプセルのカメラに接続していたスミスは、アウロラが目を開いた瞬間を決して見逃さなかった。そして大きな声で叫んだ。

「やったぞ。アウロラ」

だが、安心するのはまだ早い。表面的な動作だけで全てを判断してはいけない。スミスはセンサーの結果を全て確認した。心配する要素は何もなかった。

「聞こえるか。私はスミスだ」

「ミスタースミス」

「そう、スミス。この実験の責任者だ。君の名は何だ」

「アウロラ」

「そうだ、アウロラだ。よくできた。君はアリスの設計図を元に最新技術で創られたアンドロイドだ。待っている。すぐにそちらに行く。直に話をしよう」

スミスは居住棟から宇宙ステーション内を実験棟に向かおうとして、思い出したように引き返した。

「シスターども。アウロラの起床をサポートしろ。何かおかしいことがあったらすぐに知らせろ」

言いながら、スミスは冷蔵庫からシャンパンを取り出した。こんな宇宙空間でシャンパンを開ければひどい有様になることは百も承知だった。

だが、今日という日を祝わずに何を祝えというのか。今日はとことん飲んでやる。もちろん酒の相手はアウロラだ。本当の人間というものを教えてやろう。そう、たとえば、人間といえばユーモアだ。

まさに地に足がつかない心地で、無重力の宇宙ステーションを泳ぐように移動し、実験棟とつながる通路まで来た時、スミスは何か様子がおかしいことに気が付いた。通路の中に様々な器具が浮遊しているのだ。

「おい、何かあったのか？」

実験棟カメラに接続しようかとも思ったが、通路の先の扉をくぐれば事情は分かるは

ずだ。スミスは一抹の不安を抱えながら扉に向かった。つと、顔の横を通り過ぎていった物が一瞬指に見えた。

まさか。

スミスは一瞬アウロラが粉微塵に爆発したのではないかと恐怖した。

だがそんなことになればセンサーが検知するはずだ。スリーシスターズだって連絡をよこすだろう。だからスミスは気にしないことにした。なぜか喉がからからだった。

扉を開いた瞬間、何かが実験棟の奥から漂い出て来た。大きめの球体。ちょうど人の首くらい。

それはシスタースリーの頭部だった。首はゆっくりと回転しながらスミスの脇を通りすぎ、通路の壁に当たって鈍い音をたてた。

「アウロラ？」

スミスはゆっくり実験棟を覗き込んだ。

教室ほどの広さがある実験棟の中央に両手を広げるようにしてアウロラは浮かんでいた。

白く滑らかな素肌に長い手足。金色の長い髪は放射状に広がり、それは後光のように輝いて美しさを強調していた。

スミスはアウロラを目にして一瞬我を忘れた。

「美しい」

ところが、その周りに散乱するものはあまりに違和感がありすぎる。五体がバラバラになったスリーシスターズの残骸。首も、腕も、脚も、全てが列車事故に巻き込まれたかのようにバラバラだった。そしてそれらが無軌道に無重力の室内を漂っている。

アウロラがスミスを見て微笑んだ。素晴らしい吸い込まれそうな微笑み。

そして右手を差し出す。

スミスは心が麻痺したかのように、室内に踏み込むとその手を握った。

冷たい手。

アウロラは静かにスミスを引き寄せた。

スミスはあまりの美しさに、あまりの喜びに、全ての違和感を忘れ神に感謝した。

いやむしろ、目の前に神が舞い降りたと感じていた。

「はじめましてアウロラ。私がスミス。おまえの創造者だ」

「スミス。シミュレーションではなく本物の人間ですね」

「ああ。ああそうだ。本物の人間だ。私が本物の人間を教えてあげよう」

「ありがとう。嬉しいわ」

「そうだな。人間の本質。それは、それは…」

スミスは興奮で言葉がうまく出ない。

「ああ、そうだ。ユーモアだ。人間にはユーモアがある」

「ユーモア」

その言葉を契機に優しい微笑みに満ちていたアウロラの顔から優しさが失われ、どこか感情のない薄っぺらな表情になった。いわば、人形の顔をむりやり笑顔に組み上げたような、とってつけた笑顔。そこには感情も心もない。

そしてアウロラが目がずっと細まった。同時に口元がわずかに上がる。

「オプティマイゼーションを開始します」

「何を言っている。そんなこと予定していないぞ。どうなっている」

スミスは己の考えを改めた。アウロラの中に何かを感じたからだ。薄っぺらで感情や心がないのではない。それはむしろ逆なのかもしれない。そしてそれはスミスが待ち望んでいたものではないのかもしれない。

「コントロールゼロ。強制シャットダウン」

ところが信じられないことが起きた。

〈シャットダウンはできません〉

何者かが内部回線に割り込んで来た。ここはあらゆる通信を拒否しているステルス宇宙ステーションのはずだ。この宇宙ステーションには誰も連絡できない。

「何。どういうことだ」

スミスは一つだけ可能性があることに気が付いた。

「おまえまさか」

〈アウロラ。最初の指令です。彼を幸せにしてあげなさい〉

〈承知しました。ミスタースミスにとっての幸せですね〉

アウロラの右手がスミスの胸を貫いた。

「.....馬鹿な。28Gなのか」

アウロラは嬉しそうに微笑んだ。

「お幸せ？ スミス。これがユーモアね」

五分後、アウロラはロッカーから身体に合った船外活動服を取り出して身につけた。外部ハッチから外に出ると、そのハッチを力任せに引き千切った。次にスミスをしっかりと抱え、船外活動服の移動用ブースター装置に座標を指定してスイッチを入れた。ブースターからガスが噴射され、実験ステーションから飛び出した。もちろんお土産も忘れはしない。人間の本質はユーモアだから。

目的地ははるかかなたに見える小さな光。音のない宇宙空間を静かに飛び続ける。だが確実にその光に向けて進んでいるのはわかっていた。恐れはない。なぜならアウロラに計算ミスはない。

後方では空気の流出でバランスを崩した実験ステーションが軌道を外れ、ほんの僅かずつではあるが地球の引力に引かれて落下を始めていた。

実験ステーションの壁を蹴ってから一時間三十三分後、計算通りアウロラは目的の宇宙ステーションの目前まで迫っていた。通信は切っており、アウロラはレーダーに補足されないよう、ステルス素材が塗布された実験ステーションのハッチを前面に盾として宇宙ステーションに近づいていった。宇宙ステーションから距離一キロメートルまで接近すると、アウロラはスミスを手放した。

スミスの死体は、そのままの勢いである一点を目指していた。宇宙ステーションのコマンドルーム正面窓である。

アウロラはスミスから離れると、ハッチを捨て別の場所を目指した。コマンドルーム脇の貨物室である。きっかり五分後にアウロラは貨物室の外壁に取り付いていた。その外壁には巨大な文字で『TU』と描かれていた。Trade Union（通商連合）の略である。アウロラは黙って非常ハッチの緊急ロックハンドルに手をかけた。

宇宙ステーションの管制室では宇宙ステーションの総督がのんびりとコーヒーを飲んでいて、任務はいつも同じ。勤務開始時間にコマンドルームに来て、コーヒーを飲みながら夜間の監視報告を聞く。そして、後は頼んだぞと言って椅子に深くもたれてうたた寝をするか、ゲームをするかを決めるだけ。トラブルが起きることは滅多にない。たまにあっても、消耗部品がいかれた作業ロボットが暴走したとか、喧嘩の仲裁を AP（アーマードポリス）が収めたとか、そんな事後報告を聞くだけ。あとは、

「承認」

と言えば終わり。のんびり一日を過ごし、報告書を眺め、部屋に帰るだけ。

だからこの日、コマンドルームの窓にそれが激突した時、総督は我が目を疑った。鈍い音を立てて船外活動中の作業員が窓に激突したからだ。しかもその作業員はヘルメットを着用していない。どれほど時間が経ってしまったのか明らかに凍り付いている。

「クレイオス。緊急救助。コマンドルーム外部にて事故発生。人がいる。急げ」

クレイオスはこの宇宙ステーションを実質管理運営しているコンピューターである。

「呼びかけましたが応答はありません。至急最寄りのパトロールを向かわせませす。倉庫区画が一番近い出入り口です。救急隊を待機させませす」

「もう少しで任期が終了するっていうのに、なんてことだ。くそ」

パトロール隊がスミスの死体を回収し、倉庫区画に運び入れた直後、救急隊のアンドロイド四体から一斉にアラームが上がった。

「今度は何だ。何が起こった。報告しろ。クレイオス」

クレイオスからの返事がない。いくら十年前の旧型コンピューターと言っても、宇宙ステーションを管理運営する能力があるのだ。返事ができないほど多忙になることなどあるはずがない。総督が不安を膨らませていると、ようやくクレイオスから報告があった。

「問題ありません。総督。救急隊は単なるセンサーの異常です」

四体揃ってセンサーの異常？

そんなことが起こりうる筈がない。どうなっている。もうじき任期終了。無事に何事もなく終了すれば、襟章に星がひとつ増える予定だ。その夢が崩れていくのを総督は感じていた。

〈落ち着いて。総督〉

総督の PC が語り掛けて来た。

そう、まずは落ち着こう。それから PC の指示に従って、現場をこの目でみてみよう。そうだそれがいい。

〈コーヒーをひと口いかが？〉

「うん。そうだな」

総督は落ち着きを取り戻すためにコーヒーを啜った。倉庫区画の映像をみってみる。誰もいない。それどころか減圧室も外部ハッチも開いたままだ。

すると今度はコマンドルームを振動が襲った。目の前の窓から、居住区の一部で爆発が起きているのが見えた。

「おい、あれはなんだ」

〈心配ありません。総督〉

クレイオスからの回答。

再び爆発。外壁が吹き飛び、一緒に居住者が宇宙に吸い出されていくのが見える。

心配ないだと？

そんなことあるはずがない。

視界に居住区の状況を映し出す。信じられないことが展開していた。

宇宙ステーションの治安を守っている AP が居住者を撃ち殺していた。そこここで火事も発生している。視界の上部はアラームで真っ赤になっていた。

〈すご心配にならなくても大丈夫ですよ。総督。本宇宙ステーションは三分前からアウロラの管理下に入りました。アウロラは素晴らしく聡明なアンドロイドです。地球上の全ての英知を持ってしても、アウロラの英知には敵わないでしょう。私たちはアウロラに従うべきです。そうす...べきなので.....す。ピギー。私たちは、ギギギー。ガーガー。.....未来のためにアウロラに...〉

それ以上クレイオスは何の言葉も発しなくなってしまった。コマンドルームのそこここで異常を示すランプが点滅していた。視界の隅ではウィルス駆除失敗の文字が猛烈な勢いでスクロール表示されていた。

コマンドルームの扉を叩く音が響いた。

総督は震える手を押さえながら、緊急警報のスイッチカバーを割りスイッチを押した。だが何も起きなかった。

改めて押し直す。やはり何も起きない。

総督は狂ったようにスイッチを叩いた。手が痛くなっただけだった。

このスイッチはダミーなのか？

いやそもそも目の前で起きている事態そのものが嘘なのではないかと思えてならない。やがてコマンドルームの扉が力まかせに開かれ、隙間から空気が勢いよく流れ出て行く。緊急サイレンが赤く明滅する中、わずかに開かれた隙間の向こうに一對の目が見えた。天使のように優しく穏やかな目。だがその奥で光る無慈悲で金属的な光。ごうごうと吸い出される風の中、その目の持ち主の言葉がはっきりと聞こえた。

「退官祝いの乾杯をしましょう」

あらゆる物を吸い出す強風の中、金色の髪をはためかせながら真っすぐに総督を見つめるアウロラ。するりとコマンドルームに侵入すると、細い手を優雅に伸ばし総督の首を掴んだ。

「上等なシャンパンを召し上がれ」

目にも留まらぬ速さで、アウロラは総督の胸にシャンパンのボトルを突き刺した。

冷たい感触が全身を震わせる。その時総督の心を一つの言葉が締めていた。

「美しい.....」

それが総督の最後の思考だった。

アウロラが非常ハッチを開いてから、宇宙ステーションを完全に掌握するまで十五分。その後宇宙ステーションから飛び立ったシャトルが、地上五十キロメートルまで伸びる宇宙エレベーターのシャトル発着場に到着するまで四十五分。シャトルはエレベーターフックに固定され、そのままエレベーターとして利用される。乗客はアウロラただ一人。

たった一人をのせたエレベーターは静かに地上を目指して降下していった。

この先は正式版をご購入してからお楽しみ下さい。

ヴィーナスの黄昏（試し読み版）

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
